

■グランプリ賞 鯖江市立中央中学校3年 竹内健太「STOP!」



「なんなんだ?! いったいこの世界は?!」
と誰もが思われる作品だと思いますが、私たち審査員はこの作品を全員一致で、「第3回全国中学生アートの甲子園 グランプリ賞」に決定しました。

この絵は、人からどう思われるかなどを全く気にせずに、つくることに集中し、楽しんでつくった、エモーショナルな感じが伝わってきます。おそらく、一位を取りたい、グランプリ賞をねらいたいという気持ちではなく、想像することが楽しくて描いたように感じます。

そして、「この絵を描いた本人に会って話を聞いてみたいね」と、審査員一同が最も興味をいだいた作品です。

細部まで自身の世界を作り上げようとする熱量、本人がその絵に没入し夢中になっている世界観。見たことのない世界を魅せるというわけで

もなく、本人がとにかく見たいんだ！と描いているところにどんどんと引き込まれていきます。階段のある世界の中に多くのストーリーが隠されている、そんな魅力的な絵でした。

おそらく、ダリやキリコ、エッシャーなど、いろいろな過去の芸術家の影響を受けて描いた部分もあると思われますが、その制作表現も、ただの模倣というわけではなく、自分自身の表現にしているところが素晴らしいと思います。

【全国中学生アートの甲子園 参加中学生へのメッセージ】

技術の巧さ、綺麗さ、細密画の強さ、誰もが納得の絵の内容ですという事だけでは、人のココロは動かないものです。何よりも、描きたいという衝動や、突き動かされて描きたくて、描いてしまったという、純粹な強さを今一度見直して貰いたいと思います。

■準グランプリ賞 敦賀市立松陵中学校 3年 高木 愛花

「ひとときの光の三原色」

背伸びの瞬間、現実が非現実になるようです。所狭しと描かれたモチーフ全てに愛着が感じられ、見る度に新しい発見があります。蝶や花びらの舞が画面に動きを与え、輝く色彩と相まって室内画でありながら、小宇宙のような広がりを感じさせる作品です。



■準グランプリ賞 大津市立打出中学校 3年 伊藤 杏「道しるべ」

「本との出会いが人生の道しるべになる」という、哲学的な作品です。単に写實的



に絵を描くのではなく、何かに例えて自分の思いや考えを伝えたいと描いたのでしょう。伊藤さんにとって、迷ったり悩んだりする毎日が洞窟であり、そこで見つけた本を希望として表現したのでしょう。サイズは小さいですが、色合いも美しく、洞窟の中に引き込まれる作品です。

■金賞 志木市立志木第二中学校 3年 大塚 澄怜「それでも」



圧倒的な描写力と構成力が光る作品です。大きく中央に配置した手には不自然な力みのようなものが感じられます。作者の未来に対する不安や現状への不満でしょうか。大きく色面で分割することで思いの変化が伝わってくるようです

■金賞 志木市立志木第二中学校 3年 富増 柚衣「視野」

中学生の時期は心身ともに成長し、大人に近づく時期でもあります。そして1年生の時に感じられなかったことが、3年生になると感じられるようになることもあります。タイトルでもある「視野」という主題の中にそうした作者の“成長”や“今”がとても伝わってきます。



■金賞 細田学園中学校 3年 河野 隆太「餓えた鬼」



親から色々なものを上手く受け取れずにいる餓えた子供（＝鬼）を表した作品で、とてもシンプルな表現に留めてはいますが、テーマが明確で伝わりやすく、将来を想像させる要素があるなど、惹きつけられる作品となっています。このような個性的な作品、独特な表現も大切に評価していきたいと思い、この作品を金賞に選びました。

■金賞 奈良市立京西中学校 3年 増田 光希「愛情」

日本画のような細かな線で毛並みが丹念に描かれていて、愛犬モカへの愛情が伝わってくるようです。色鉛筆での表現は、写実性に優れ、実際のサイズよりさらに大きく描き、モカが今ここにいるようです。祖母との関係をモカの瞳の中に表現しているのでしょうか。犬が祖母に見えてきます。

